フィールド（現場）からの風 ⑰

宮田守男

地域を守る、消防団に地域や職場が関心を寄せる事について考えてみませんか

3月下旬、歴代の白馬村消防団長・消防主任会の集まりに参加する機会があった。消防団長は26代目、消防主任は21代目を数える集まりだが、既に14名が他界。会の冒頭の「黙とう」も通例行事となってしまうほど、月日を積み重ねた会でもある。総務省消防庁の平成26年中のデータによると、全国には消防団員が約86万人、年間962万人が出動し、予防消防や火災・風水害の対応に活躍している。しかし全国的には、消防団員の高齢化が進み、昭和40年に40歳以上の団員の割合9・5％が、平成27年には47・3％となり、更なる高齢化社会への対応に課題が生じ、消防団の運営は年々困難さを増していることも事実だ。

白馬地域の中央部の南北にフォッサマグナが走り、この大断層地帯に、激しい気候変動を原因とする自然現象が災いし、在籍中は必ず災害と向き合った歴代団長と消防主任。

消防主任は、役場職員が当たるのだが、他の業務と異なり、団員の命を預かる気の抜けない業務経験は、緊張の連続。だからこそ、その苦労を共感するための集まりが、この会を継続している原動力になっているのだろう。指示命令で行動する消防組織、その指示により命を危険にさせる事態も危惧される。平常時は冷静でも災害時や燃え盛る火を目前にして、人格が変わる人がいる事も事実だ。

だからこそ指示に忠実に従ってもらう組織運営が求められる。この経験を積むと、言葉が明瞭になり、自分の信念を曲げない気概が身に着いてしまう。その為か、懇親会での会話は、大いに盛り上がる。業務当時の感情を揺り起こす楽しさかもしれない。

現職の正副消防団長は、神城断層地震の最前線で活躍。震災直後から防災無線を活用し、早期に被害の大きい地域を特定、人員を集中的に投入、いち早く常備消防や地域住民と共に救助活動に。停電対応では投光器などの消防機材の投入や、崩壊危険個所へのブルーシートでの養生。盗難等を防ぐための防犯パトロールなど11月22日～29日の間、延べ608名の消防団員を出動。当時の消防業務の困難さへの想いを共感する事ができた集まりでもあった。村外勤務や家庭の事情で消防団員となる困難さは、今後も変わらないだろうが、その困難さを共感する地域や職場になってほしいと思っている。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

消防団の活躍は、内閣総理大臣・消防庁長官・長野県知事・長野県消防協会・長野放送で表彰の栄誉が与えられた。